し、歴史を陰陽のリスムを持つものと考へてゐるのは注目すべきことである。

元來一つの文明が存續するためには自己に對立する文明の存在が必要なのだ。神は人間の生活を完全無爲の狀態より脱出せしめこれを向上せしめるために惡魔を置いたといはれる。文明に於ける惡魔的なるものの出現が『危機』である。これがあらはれることによつて緊張の狀態が保たれてゆく。危機の試煉にたえこれを乘越えてゆくところに文明の發達がある。同じ狀態に停滯する文化は亡びる。そしてこれを乘り超えさせるものは精神的なものである。

人類最後の文明はこの樣な幾多の試煉を經て停滯なく向上していつたところのものといふことにならう。

東西兩陣營の和解可能の一理由として彼は、兩者が相互に相互の對決者として刺戟し合ひ、相互に進歩しつつそれぞれの場處に獨自の生活を營んでゆくことになるであらうといひ、その爲に世界國家が必要で、それをつなぐものは宗教的なものでなければならぬといふ。

この樣なトインビーの史觀を眺め、日本人として又大乘佛教の文明の下にあるものとして考へる時、われわれはこの文明の存續を願ふが故に、これと對立する惡魔的存在としての西洋文明に對しわれ關せずの態度を取ることなく、勇敢にこれと對決することが必要である。周圍から寄せて來る文明と戰ひ決して逃避することなく、それによつて大乘佛教文明を形成せねばならぬ。

明日の日本を思ふ時、特に佛教の將來を考へる時、トインビーの史觀はまさしくわれわれの進み方に一つの示唆を與へるものである。（文責在記者）

大谷學會秋季公開講演要旨

今回は特に清澤滿之先生の五十年忌を記念して擧行された。

眞宗と精神主義

本學名譽教授　金子大榮氏

清澤先生の思想、それは有限と無限との關係にある。卽ち有限よりみれば無限はその外にあり、無限よりみれば有限はそのうちにあるといふ、これが先生のすべての思考方式であつた。しかも有限者の自覺とその有限性の限界における無限者との對應は決して論理的にのみなされるものでなく、つねにそれは體驗的になされるものであつたのであるが、さらに、その有限と無限との交渉には、まづ有限の中に無限なるものを受け入れるといふ受用のはたらきと、いま一つ有限なるものを無限の中に歸入せしめるといふはたらきが考へられる。而して有限者の無限なるものの受用とはかへつて無限者が自らを有限なるものにして有限の中に入ることであり、さらに有限者の無限への歸入とは無限者より云はば招き入れることである。

さて、無限者よりみれば有限者が有限であることは偶然なことである。まことなるものよりみればすべてはまことであるべきはづであるから、如來より云へば衆生が迷ふているといふこ

とは偶然である。それに對して、有限者にとつては無限なるものをみることは偶然であり、かへつてまよふている有限性こそ必然的なものである。いかに知識を求め道德を求めてみようとも人であることのおろかさ、人であることのつみの深さはつひに人間である限りはなれ得ないものであつてみれば、人であることの惱みのつきぬことは人間にとつては必然的なることである。しかもこの樣な人間がその有限であることの悲しみにおいて無限なるものにふれ得ることは偶然である。而してその偶然性も無限なるものより云はば實は必然的なことであつたのである。

さて、先生の精神主義のその實際的意義は、要するに我々はどうなつてもよいといふこと、さらになにをしてもよいといふことである。然るに今日の人々の所謂どうなつてもよいといふことは單なる虛無主義でしかなく、そのなにをしてもよいとは要するところ惡魔主義であるにすぎない。我々が有限の世界のそのうちに究極の自由を求めようとしていたことのあやまりをしらしめられ、この世のどうにもならぬものであるといふ絕對の惱みに、そこにはじめてどうなつてもよいといふ無限なるものより與へられたすなほにしてやはらかなる意念の自由が感ぜられてゆくのである。また我々が何をなしてもよいといふことは大いなる解放である。宗教とは大いなるところに於て汝いかなることでも爲せといふことである。しかもその大いなる解放の境地のうちに自からなる自制、自律の生活がある。先生の謹嚴なる生活態度も亦ここにあつたのである。

從來、眞宗の教は一般に賢き者、指導者のためのものでなく愚かなる者のための教であるとされてきた。しかし今日最もあはれむべき者は、自から知識人であり指導者であると思ひ、財にほこり權力を恣ままにし、或は自らは善人と思ひこんでそこに滿足している人たちではなからうか。如來の大悲はかへつてその樣な人たちにこそかけられているのである。而して先生は又その知識人のもつ限界を身をもつて自覺せられた人であつた。

（奥田記）

雙非の論理

京大教授文學博士　山内得立氏

雙非の論理といふ言葉で私は佛教的な論理を言ひ表したいのであるが、之を說明するに當つて、それが一般的論理の間に於て如何なる位置にあるかといふ事を考へて行きたい。先づ一般的論理に於ては、エレア學派のパルメニデスの哲學が重要な問題を持つ。彼は、ナィーヴな自然哲學者の中にあつて、宇宙の本體は存在であるとして、始めて哲學の領域を發見した。存在とは如何なるものか。彼はかういふ、「存在は存在である」。此の言葉は確かである、のみならず此處から論理が發展した——即ち A ist A といふ同一判斷、論理的根本概念を發見したのはパルメニデスである。次に出て來る原理は、存在は存在であつて決して非存在でない、肯定と否定とは同時に成立たない、かかる矛盾律はゼノンによつて發見された。第三の原理は肯定判斷か否定判斷で第三のものはないといふ排中律である。發見